

# 東アジア都市の音環境をめぐる人類学的研究 —香港の獅子舞・龍舞を中心に—

辻本香子

総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻 博士課程

## 研究の概要

中国の伝統芸能である龍舞や獅子舞は、祭りや儀礼の際に演じられてきた。現代の香港では、こうした祭事での龍舞は飲食店やショッピングモール、運動場などでおこなわれ、楽器の音は都市のノイズと混淆して響いている。

しかし近年の東・東南アジアでは、地域の伝統芸能から、世界各地に暮らす中国にルーツを持つ人々の間で共通のスポーツ種目としての側面を急成長させている。これら多様化する都市の音を捉える人々の聴覚の変容を探るため、香港のチームを対象としたフィールドワークを通して、現代の都市において、スポーツ化する芸能がどのように伝承され、その音が人々の暮らしのなかでどのように聴かれているかを追う。

## 1. 本研究の位置づけと分析方法

### 1-1. 現代の都市と音楽

世界各地の大都市には高層ビルが立ち並び、それと郊外部を結ぶ高速道路が、通勤時に見える風景を拡張している<sup>1)</sup>。グローバリゼーションが世界の風景を画一化している、と言われることもある。しかし、これらの景観はどれも、目に見える特徴から語られている。こうした都市風景の中を実際に歩いてみると、我々の耳には、人の声に加え、電子音の響きやスピーカーからの多種多様な音楽などが混ざり合っただけで届いてくる。風景をその他の知覚によって捉えるとき、我々の前にはまた別の姿が立ち上がる。

音の環境を考えるサウンドスケープ研究が始まった1960年代には、「都市の騒音」はおもに工場や自動車道路などから発せられていた。しかし21世紀の現在、都市の音環境を構成しているこれらの音は、都市で生きる人々自身の生活によって生み出されており、それを「良い音・悪い音」というラベルをつけることもより困難になっている。

### 1-2. 音楽とそこのおかれた環境の多様化

こうした音環境には、当然のことながら音楽も含まれる。民族音楽学（音楽民族学）的な観点からも、グローバリゼーションの影響はしばしば論じられてきた。どこにいても同じCDや音楽データを手にすることができ、どこで録音したものであっても機会さえあれば世界中に流通させることができる。かつては地域共同体で受け継がれ演じられてきた伝統的な音楽もまた、この流れに大きく影響を受けている。

この現象を指して、世界の音楽文化が均質化されているとも言われる。しかし、たとえばインドネシアでは、地域固有の音楽、国全体で通用する音楽、そして世界で流通している音楽がジャンルによってはっきりと分かれており、一つの地域で耳にすることのできる音楽は多層的であるという<sup>2)</sup>。このように、ある場所における「音楽」を、一種類だけ切り離して研究するという従来の民族音楽学の方法では、実際にそこで鳴り響いている音の諸相を描ききることができなくなってきた。

また、インドネシアの状況はサウンドスケープ研究に対しても新しい視野を提供している。サウンドスケープ研究が発展してきた北米や西欧で用いられてきた歴史的認識は、個々の地域における音のはっきりと聞き取れていた前近代の世界から、工業化に沿って近代の音環境が静けさに取って代わり、それが近年のポータブルオーディオの発達に伴って個人レベルに切り離されている、という物語であった。しかしこの物語はアジアには適用できない、と中川眞は指摘する。インドネシアの前近代と近・現代の音環境は連続しており、このように切り離して論じることはできない。変化は同時に起こり、音もまたすべてを巻き込んで鳴り響き続けているのである<sup>3)</sup>。中川は、アジアにおいてはまた異なったサウンドスケープの分析法が必要であると主張している。

先に述べたような現代の都市では、携帯電話やインターネット端末、ポータブルオーディオやゲーム機など、

そこで生きる人々が使用するコミュニケーション手段としての音が、音環境を構成する重要な要素となっている。本研究はこのような環境のなかで演じられる中国の龍舞と獅子舞を対象に、長期の人類学的フィールドワークによって調査を進めたものである。

## 2. 調査の方法と活動の内容

### 2-1. 調査対象とその概要

筆者は2003年より、中国伝統芸能と都市のサウンドスケープをめぐる研究に関わっている。中国の龍舞と獅子舞は、中国の北方起源のものと同南方起源のものに分けられ、用いられる楽器も南北で異なる。現在、高度に競技化が進んでいるのは北方龍舞、南方獅子舞であり、北方獅子舞の競技も行われている。中国国内における政情のために、これらをもっとも積極的に伝承してきたのは、シンガポール・マレーシアに移民した華僑たちであった。現在は、台湾をはじめ香港や中国大陸でも伝承が盛んであるが、競技としての龍舞・獅子舞においては現在でもこの東南アジア両国がもっとも進んでいるといわれている。

これまでの先行研究は、主にその中国人コミュニティにおける芸能の伝承とアイデンティティの形成、ホスト社会への適応といった面に重きを置いてきた<sup>4) 5)</sup>。

本研究は、先行研究が看過してきた、舞と音が担い手以外の人々をも巻き込んで都市の風景を構成しているという点に着目する。そのため、中国にルーツを持つ人々がマイノリティとはならない大都市である香港を調査フィールドとして選び、2008年より香港での調査を開始した。2009年度は主として、香港で活動する龍舞チームのひとつに参加し、楽器を学びながら参与観察をおこなった。当該チームは1990年代半ばに結成され、10代から20代後半の男女によって形成されている。2000年前後から国際的な競技会への参加を開始し、現在では政府からの認定を受け、香港の代表チームとして活動している。

### 2-2. 香港における「中国国術」と武館

太陰暦の新年には、世界各地のチャイナタウンでこれらの芸能をみることができるが、香港においては、これらの舞は中国国術（マーシャルアーツ）の一部として扱われている。中国国術の中でも多くの継承者を抱えるのが功夫（カンフー）や太極拳である。主に、一人の師匠が多くの徒弟を教え、弟子が一人前になるとまた弟子を

取るというシステムで、公共の公園や広場、公民館や公営体育館などを利用してレッスンが行われている。

それら練習場所とは別に、これらの人々を束ねるための事務所を構えるケースも多い。国術の師匠は、その多くが整体や整骨など中国伝統医療を本業としており、それらに併設された事務所を「武館」を呼ぶ。龍舞や獅子舞は、これらの武館の看板としての役割を果たし、祝い事や地域のイベントに呼ばれてパフォーマンスをし、謝礼を受け取ることで経営しているケースが多い。また、競技にも力を入れている場合は、競技会での賞金なども収入源となっているほか、近年では小中学校の課外活動として指導を請け負う例も見られる。

### 2-3. 伝承のシステム

#### 2-3-1. 楽器の習得

龍舞と獅子舞は、広東太鼓、及び金属でできた鑼（銅鑼）と鐃（シンバル）を伴う。これらの楽器は東アジアにおいて伝統的とされる音楽や舞台劇などで多く用いられるものである。筆者の調査では、担い手たちが活動を開始した1990年代から現在に至るまで、チームの外に明確な指導者はいないという。楽器の習得は、責任者がVCDやインターネット上で他のチームによる演技を聴き、それを覚えてメンバーに教授する、という方法でおこなわれ、楽譜は存在せず、教える際には口唱歌が用いられる。記録と記憶の補助となるのは携帯電話のカメラで、録画した音を繰り返し聴いて習得する。楽器の構えも一定しておらず、他のチームの演技で聴いた音を出すために試行錯誤を繰り返すなど、従来一般的であった「伝統芸能の継承」とは大きく異なった伝達方法が取られている。

#### 2-3-2. 人間関係と呼称

伝承方法がきわめて現代的であるのと対照的に、師弟関係は厳密である。一般的に国術の師匠は「師傅」と呼ばれるが、団体の内部では「傳」と同じ字の「父」という字をあてて呼ぶ。その他の関係者に対する呼称は、自己と「師父」の関係性を軸に、中国語における父方の親族呼称を用いたものとなる<sup>6)</sup>（図1参照）。

#### 2-3-3. 場所とパフォーマンス

先に述べたように、演技はしばしば人の集まる場所でおこなわれる。また、筆者が調査をしたチームは、練習場所を主に屋外に設定していた。主に夜間に練習をする

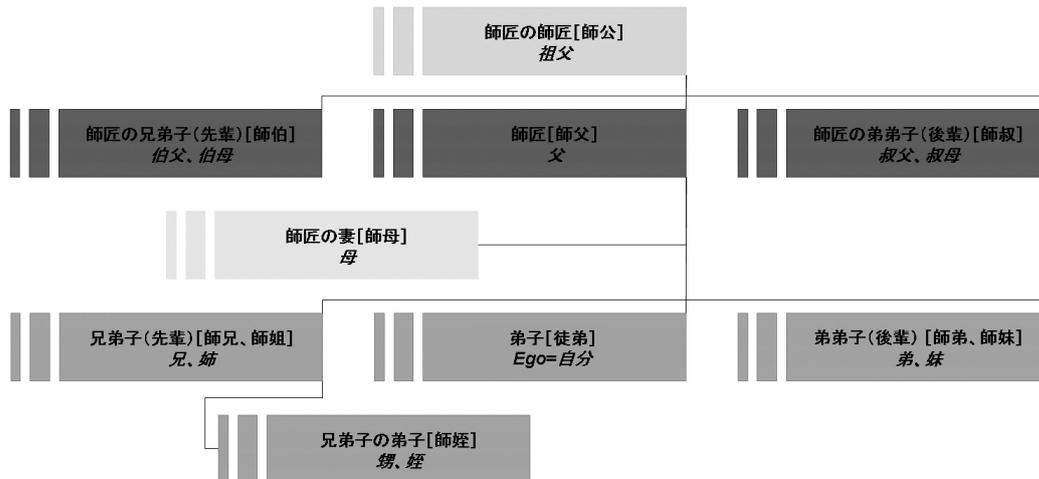


図1 武館の伝承システムにおける呼称の関係図

ため、騒音にも注意を払う必要があり、玩具の楽器や壊れた楽器を用いて音を抑えていた。

龍舞・獅子舞が呼ばれる場合は、香港の場合、地域の祭りのほか政府が主催する観光客向けイベントや、大きな行事の開幕時、また商店や会社の開業祝いや個人の誕生日パーティなど多岐にわたる。大きなイベントは屋外の公園などで、法人や個人からの依頼はショッピングモールやレストランなどであることが多い。こうした場所で大きな楽器の音を聴くのは、祝われる当事者だけではなく、その場に居合わせた一般の市民も含まれる。そしてそれらの音は、BGM や電話の音などと常に重なって聴かれている。

#### 2-3-4. ネットワークと情報技術

現在、龍舞と獅子舞はスポーツとして発展しつつあり、各地で競技会が開かれ、アジア室内競技大会の正式種目ともなっているが、楽器に関しては細かいルールはなく、そのため各チームが思い思いの工夫を凝らしている。太鼓・大小の銅鑼・大小の鑼という基本の構成の場合もあれば、その他の楽器を組み合わせる場合もある。たとえば2010年の国際競技会では、日本チームが横笛を組み合わせる和服を衣装としたり、フィリピンのチームが銅鑼を置いてトンガトン（ルソン島に見られる竹製の楽器）を鳴らしたりと、自由なアレンジが施されていた。また、現場で楽器を使わないという選択肢もあり、あらかじめ録音したものを利用したり、規定の時間どおりに編集したBGMを用いることも多い。

競技やパフォーマンスの後には、先に述べたように撮影された動画がインターネット上にアップロードされ、

実際に参加しない人々もそこで動画を見ることができ、技術を学ぶための素材としても活用される。

### 3. 本研究の成果：重なり合うサウンドスケープ

こうした複雑で重層的なサウンドスケープを、どのように分析することができるだろうか。1960年代の人類学者たちは、パーカッションの音が聖なる世界を開く窓口の機能をもつことを指摘している<sup>7) 8)</sup>。現在の香港でもまた、これらの大きな音は太陰暦の新年に代表されるように、住民たちに祝祭の空気を思い起こさせるものである。それは年中行事の一部であるとともに、日々の生活に密着したものである。しかし、住民たちは龍や獅子が舞う音を耳にしても、自らの暮らしを構成する音を止めることはない。それは競技会場においてすら同様であり、太鼓や銅鑼の音のほかに、必ず携帯電話の音やゲーム機の音が響いている。それは、構成要素はまったく異なるが、パプアニューギニアの熱帯雨林においてフェルドが見出した、集まった人々が思い思いに発話をしていてもコミュニケーションが成立し、作り出す音が決して重ならず調和してそこにある、という、「重ね上げた響き」<sup>9)</sup>の、都市におけるひとつの形態であると言えるかもしれない。

### 謝 辞

本研究は、平成21年度の財団法人三島海雲記念財団の支援のほか、平成20年度の財団法人松下国際財団の研究助成、及び財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団による留学奨学金を受けて行ったものである。

また、調査に際しては、香港北少林門龍子祥國術總會

の龍隊の皆さん、及び妙趣雅集顧式太極會の皆さんの全面的な協力をいただいた。本報告書の内容は、主に呉乾亨氏、黄徳禹氏、林祥平氏からの情報提供に基づいている。ここに感謝を申し上げたい。

#### 参考文献・図表一覧

- 1) レルフ, エドワード: 都市景観の 20 世紀, 高野岳彦訳, 筑摩書房, 1987(1999).
- 2) 福岡正太: 音楽にみるグローバリゼーションと地域性 (徳丸吉彦・青山昌文編, 改訂版 芸術・文化・社会) pp.159-172, 東京, 放送大学

教育振興会, 2006.

- 3) 中川眞: 平安京 音の宇宙, 東京, 平凡社, 1992 (2004).
- 4) 王維: 日本華僑における伝統の再編とエスニシティー祭祀と芸能を中心に, 東京, 風響社, 2001.
- 5) 張玉玲: 国際開発研究フォーラム, 23, 2003.
- 6) 図 1 参照
- 7) レヴィ=ストロース, クロード: 生のもとは火を通したもの, 早水洋太郎訳, みすず書房, 1964(2006).
- 8) Needham, Rodney: *Man(N. S.)* 2(4), 606-614, 1967.
- 9) Steven Feld: *Music Grooves: Essays and Dialogues* (Charles Keil and Steven Feld, eds.), pp.109-150, University of Chicago Press, 1994.